

「読書感想文コンクール」を 実施しました

葛飾区では、児童・生徒の読書活動を推進するために「読書感想文コンクール」を実施しています。
今年度は、小学生1万7千625点、中学生5千184点の応募があり、356人の作品が入選しました。各部門の最優秀賞・優秀賞・佳作入選者は次のとおりです。

- 小学校低学年の部 最優秀賞 登山 煌太(白鳥小2年)
- 優秀賞 玉越 航平(末広小1年) 武井 紬(北野小1年)
- 佳作 弦間 咲子(上平井小2年) 中川 怜華(柴又小1年) 河良 光暉(東柴又小2年)
- 小学校中学年の部 最優秀賞 小口 愛実(小松南小4年)
- 優秀賞 江川 倅雅(末広小4年) 望月 みのり(松上小3年)
- 佳作 田原 万宥子(梅田小4年) 小川 由晏(住吉小3年) 高橋 玲奈(原田小3年)
- 小学校高学年の部 最優秀賞 石塚 こころ(松上小6年)
- 優秀賞 岩田 瀬奈(葛飾小5年) 押木 美桜(花の木小6年)



例えば、中国系アメリカ人のエミリーは、日本が起こした南京大虐殺について、日本人をこらしめるべきだったと言い、ユダヤ系アメリカ人のナオミは、日本人は、ユダヤ人を迫害したナチス・ドイツの仲間であり、原爆投下は必然的なものであったと言っている。そして、日系アメリカ人のケン、自分の見た目は日本人かもしれないが、中身はアメリカ人であり、日本という国は、自分にとっては外国だから、原爆投下は必要悪であったと言っている。

私は、ここで初めて、自分が原爆投下を、「日本人」として許せないと思っていることに気がついた。もしも、私が日本に住んでいなかったら、原爆投下を許せないと思っただろうか。多くの命が失われたという事実は変わらない。けれども、それが、もしも、隣の国の話だったらどうだろうか。第三回の討論会の最後の主張で、肯定派のリーダーであるノーマンが、言っていたことを思い出す。広島平和記念公園にある慰霊碑には、「日本人」がこの戦争に責任を感じ、懺悔をしていると刻まれている。ならば、「日本人」としても、原爆投下が間違っていたとは言えないのか。私の頭の中で疑問符があふれ返るほど湧き出て、思考の迷路に閉じこめられそうだった。そんな私を導いてくれたのが、最終ラウンドのメイの発表に出てきた、慰霊碑の「正しい」解釈であった。

ノーマンは、慰霊碑の文章の主語を、「日本人」としていたが、実際の主語は、「われわれ人類」という大きなものだったのだ。つまり、原爆の投下は、「アメリカ人」の責任でも、「日本人」の責任でもなく、「われわれ人類」全体の罪であると言っているのだ。

そこで、私は、自分の頭を悩ませた様々な疑問が、一瞬で一つの道へと導かれたような気持ちがあった。私は最初、「アメリカ人」は原爆投下についてどう思っているのかという疑問を抱き、そして、「日本人」として、それを許せないという感情を抱いたが、根本は、そこではなかったのだ。「アメリカ人」でもなく、「日本人」でもなく、「人類」として、この過ちを二度と繰り返さないようにすること。それこそが、原爆の苦しみを経験した、先人たちが出した答えなのだった。

地球全体で、人々の安全と平和を創造するために、戦争という行為はやってはいけない。片方が良い結果になるようにするのはよくない。互いに住む人類として、互いが良い結果になり、互いを支えあっていることを目指すが、平和を創造する第一歩であると思う。では、そのために、私たちに何ができるのだろうか。

私は、これまで、極力人と争わないようにしてきた。小学校高学年から始めた卓球でも、対戦相手と口論になりかけたとき、なぜ、相手は自分に対して不満を抱いているのか、相手の立場になつて、必ず考えるようにしてきた。その方が、自分も相手も、「幸せ」だと思ったからだ。これを、人種の意識に当てはめてみても、同じことが言えるのではないだろうか。過去の歴史から、「○○人だから、悪者だ」と決めつけるのではなく、まずは、自分の内側になる敵と向き合い、互いを尊重しあうことから始めなくてはならない。

世界は、本来平等である。人種による区別は存在しない。「幸せ」というのは、世界共通の認識であるべきなのだ。平和を創造するにはどうすればいいのか、分からないこともあるだろう。しかし、たとえ答えが出なくとも、互いを認め合い、憎しみを生まない心でいることで、少しでも答えに近づくことができる。私は思うのだ。

- 佳作 中田 結菜(末広小5年) 五十嵐 琴子(青戸小6年) 吉水 桜葉(花の木小5年)
 - 中学校の部 最優秀賞 花岡 大樹(奥戸中3年)
 - 優秀賞 大角 奏歩(水元中1年) 渡邊 拓真(四ツ木中1年) 柿島 美玖(東金町中1年)
 - 佳作 緒方 一華(本田中3年) 細川 由衣(奥戸中2年) 永原 凜(綾瀬中2年) 禎々子(小松中3年) 青木 舞(亀有中3年) 守屋 なつ海(常盤中3年)
- 指導室 ☎ (5654) 8573 (敬称略)

中学校の部・最優秀賞 平和を創造するために

奥戸中学校 三年 花岡 大樹

一九四五年八月六日。それは、日本人なら誰もが忘れてはならない歴史的な悲劇がおきた日。数え切れないほどたくさんの人々が猛火の中を逃げまどい、肌を焼かれ、熱さの苦しみにまがきながら、多くの命の灯が無残にもかき消されていった。

広島、長崎への原爆投下。この歴史的事実を、私は、間違っていたことであり、絶対に許すことはできないと思う。しかし、私の中には、ずっと胸の底にくすぶり続けている疑問があった。それは、日本に原爆を投下した事実に対して、アメリカ人の子どもや学生は、どのように思っているのかというものだった。その疑問を解決してくれたのが、この夏、私が出会った一冊の本だった。

この本は、日本人の母とアメリカ人の父をもつメイを始めとした、アメリカに住む高校生六人が、夏休みの間、「日本への原爆投下の是非」について、「肯定派」と「否定派」に別れ、計四回のディベートをする話である。その中でも、私が特に興味深いと思ったのは、私が思う「アメリカ人」というものが、いかに曖昧なものなのかということだった。彼らは、「アメリカ人」という枠を超えて、それぞれの人種を基盤とするアイデンティティを保持していた。